ユタ戦争とマウンテンメドーの虐殺

高まる緊張が引き起こしたユタ戦争

最初の末日聖徒の開拓者がソルトレーク盆地に到着してから 3 年後，合衆国政府はユタ準州を組織し，ブリガム・ヤングをその準州の最初の知事として任命しました。1857 年中頃，末日聖徒の指導者は，連邦政府がブリガム・ヤングの代わりに多数の連邦軍兵士を従えた新しいユタ準州知事を任命する可能性があるといううわさを耳にしました。 1857 年 7 月 24 日，ブリガム・ヤング大管長は，聖徒たちとソルトレーク・シティー到着の 10 周年記念を祝っている最中に，軍隊がソルトレーク・シティーに向かっているという以前の知らせの確認状を受けました。

それまでの数年間，意見の相違と誤解が原因で，末日聖徒と合衆国政府当局との間における緊張が高まりつつありました。自分たちが選んだ指導者によって準州が治められることを望んでいた聖徒たちは，不誠実で腐敗しており，道徳観に欠けた人物さえもいる，価値観を共有しない連邦被任命者を拒否しました。連邦当局の一部は，聖徒によるこの行為と姿勢が合衆国政府に対する反逆であると考えました。

アメリカ合衆国大統領ジェームズ・ブキャナンは，新しい知事を安全にユタに送り届けるため，および聖徒の間での反逆と思われる行為を鎮圧するために，約 2,500 人の軍隊をソルトレーク・シティーに進軍させました。この決定は，ユタの状況についての正確な情報を得ることなく行われました（『時満ちる時代の教会歴史生徒用資料』第 2 版〔教会教育システム手引き〕，368 － 371参照）

準州を守るための準備

聖徒に対する説教で，ヤング大管長とその他の教会の指導者は，迫り来る軍隊を敵と評しました。彼らは，軍隊が以前オハイオ州，ミズーリ州，およびイリノイ州から聖徒を追い出したときと同じように，ユタからも聖徒たちを追放する可能性があると恐れました。聖徒たちに穀物を保存するよう長年の間求めてきたヤング大管長は，軍隊から逃げる必要があった場合に食物があるように，その指示を新たにしました。ユタ準州の知事として，ヤング大管長はユタ準州民兵にも領土を守る準備を整えるよう指示を出しました。

移住者幌馬車隊との対立

末日聖徒が迫り来る合衆国軍隊から準州を守るために準備を整えていたそのとき，アーカンソー州からカリフォルニアに向けて旅をしていた移住者の幌馬車隊がユタに到着しました。移住者幌馬車隊のメンバーには，穀物を保存する指示を受けていた聖徒から大いに必要とされていた穀物を購入することが困難であったため，憤りを感じた者もいました。一部の移住者は，自分の家畜に必要とする餌や水を移住者幌馬車隊の多数の馬や牛に食べられてしまうことを嫌がる聖徒と対峙しました。

両者の緊迫状態は，カリフォルニアに向かう途中の最後の開拓地であったシーダーシティーで発火点に達しました。一部の移住者幌馬車隊メンバーと一部の末日聖徒の間で対立が生じ，幌馬車隊メンバーの中には進軍している軍隊に参加して末日聖徒と戦うと脅迫する者もいました。幌馬車隊のキャプテンはこのような脅迫を行うことについて仲間を叱責しましたが，シーダーシティーの指導者と入植者は移住者たちを敵と見なしました。幌馬車の一団は到着してから 1 時間余りで町を出ましたが，シーダーシティーの指導者と入植者の何人かは，彼らの気分を害した男たちを追跡し，懲らしめたいと考えていました。

激化する対立

これらの聖徒は主の方法で移住者とのいさかいを解決しなかったため，状況は一層深刻になっていきました。民兵少佐であり，ステーク会長でもあったシーダーシティー市長のアイザック・ヘイトは，近隣の開拓地パロワンに住む民兵指揮官に幌馬車隊の罪人と対決するための民兵の出動許可を要請しました。教会員である民兵指揮官のウィリアム・デームは，移住者たちの脅しを無視するように勧告しました。しかし，アイザック・ヘイトはその勧告に従う代わりに，他のシーダーシティー指導者とともに，移住者を懲らしめる手立てとして幌馬車隊を襲って牛を盗むように地域のインディアンを説得することに決めました。アイザック･ヘイトは，地元の教会員で民兵少佐のジョン・D・リーに攻撃を指揮するよう依頼し，二人はその行為の罪をインディアンに負わせようと計画しました。

移住者への攻撃

アイザック・ヘイトは，幌馬車隊を攻撃する計画を地元の教会，コミュニティ，および民兵の評議会の指導者たちに提案しました。一部の評議会メンバーはその計画に強く反対し，アイザック・ヘイトにこの計画についてブリガム・ヤング大管長に相談したのかと尋ねました。相談していないと答えたヘイトは，状況を説明し，対応方法を尋ねる手紙を携えたジェームズ・ハスラムを急使としてソルトレーク･シティーに送ることに同意しました。ところが，ソルトレーク・シティーはシーダーシティーからは約 250 マイル（402 キロ）離れていたため，急使が馬をはせてソルトレーク・シティーに到着し，ヤング大管長の指示をシーダーシティーに持ち帰ったとしてもおよそ 1 週間かかりました。

アイザック・ヘイトが手紙を託して急使を送り出す直前，ジョン・D・リーとインディアンの一団がマウンテンメドーと呼ばれる場所の移住者キャンプを襲いました。攻撃を指揮したのはリーでしたが，インディアンのみが関与した

ように見せるため，自分の身分は明らかにしませんでした。移住者の一部は殺され，怪我を負い，残りの移住者は攻撃者を撃退し，リーとインディアンを退却させました。移住者は防御のため，幌馬車で素早く厳重な円陣を作りました。5 日にわたる幌馬車隊の包囲攻撃の間，攻撃はあと 2 回繰り返されました。

あるとき，幌馬車隊の外にいた二人の移住者に気がついたシーダーシティー民兵は，その二人に発砲し，一人を殺してしまいました。もう一人の移住者はその場を逃れ，幌馬車隊への攻撃に白人がかかわっているという知らせを幌馬車に持ち帰りました。攻撃を計画した者は，自分の偽りから逃れることができなくなってしまいました。移住者たちをカリフォルニアに行かせてしまうと，幌馬車隊攻撃の首謀者が末日聖徒だという知らせが広がることになります。共謀者たちは，この知らせが彼ら自身，そして周りの人々に悪影響を与えることを恐れました。

マウンテンメドーの虐殺

幌馬車隊の攻撃に末日聖徒が関与したという知らせが広まることを防ごうとしたアイザック・ヘイト，ジョン・D・リー，および地元の教会と民兵のその他指導者たちは，小さな子供たちを除いた幌馬車隊全員を殺害する計画を立てました。計画を実行に移したジョン・D・リーは，移住者たちに民兵が彼らを安全にシーダーシティーに連れ戻し，今後の攻撃から守ると持ちかけました。移住者たちがシーダーシティーへ戻る途中，民兵は移住者に向かって発砲しました。入植者に雇われた数人のインディアンが隠れていた場所から飛び出し，攻撃に参加しました。その幌馬車隊のメンバーであった約 140 人の移住者のうち，生き延びたのは 17人の小さな子供たちだけでした。

虐殺の 2 日後，ジェームズ・ハスラムが幌馬車隊を放免するように指示するヤング大管長の返信を携えてシーダーシティーに戻って来ました。「ヤングの手紙を読んだヘイトは子供のようにむせび泣きながら，搾り出すように『遅すぎる，遅すぎる』という言葉を口にしました。」（リチャード・E・ターリー・ジュニア，“The Mountain Meadows Massacre,” Ensign, 2007 年 9 月 号，20）

悲劇的な結果

マウンテンメドーの虐殺は 120 人の死を招いただけでなく，生き残った子供たちと被害者の親戚たちに大きな苦痛をもたらしました。一部の末日聖徒は，虐殺を生き延びた移住者の子供たちを迎え入れ，世話をしました。1859 年，連邦当局が子供たちを保護し，子供たちをアーカンソーの親戚の元に連れ帰りました。パイユート・インディアンもまた，この犯罪に対して不当な非難を受けました。

虐殺について知った教会の指導者

「ソルトレーク・シティーにいたブリガム・ヤングと教会の指導者は虐殺後間もなくその事実を知りましたが，入植者がこの事件に関与していた度合いや，犯行の恐ろしい詳細については，時を追って次第に明らかにされていきました。1859 年，アイザック・ヘイトはステーク会長の召しから解任され，その他虐殺に関与したシーダーシティーの著名な教会の指導者もその職から解かれました。そして 1870 年，教会はアイザック・ヘイトとジョン・D・リーを破門しました。

準州の最高陪審員団は 1874 年に虐殺に関与した 9 名を起訴しました。最終的に彼らの大半は逮捕されましたが，裁判で審理を受けて，有罪の判決を受け，死刑に処せられたのはリーだけでした。起訴された一人の男は共犯の証言をし（自発的に他の被告人について不利な証言をした），その他の被告人は長年の間法から逃げ続けました。虐殺に加わった他の民兵は残りの生涯を通じて，絶えず深い罪の意識にさいなまれ，自分が行ったことや目にした出来事について，繰り返し悪夢にうなされました。」（リチャード・E・ターリー・ジュニア，“The Mountain Meadows Massacre,” Ensign, 2007 年 9 月 号，20）

マウンテンメドーの虐殺 150 年追悼記念

ヘンリー・B・アイリング管長は次のように述べています。

「（マウンテンメドーの）虐殺の責任は，市および軍隊の職に就いていた，マウンテンメドー近くの地域の末日聖徒イエス・キリスト教会の地元指導者たちとその指揮下にあった教会員にあるというものでした。……

……わたしたちが信奉するイエス・キリストの福音は，男女，子供たちを殺すという冷酷な殺人を嫌悪しています。確かに，平安と赦しを主張しているのです。はるか昔に（マウンテンメドーで）教会員によって行われた行為は，キリスト教の教えと行動からかけ離れた恐ろしく弁解の余地のない出来事でした。……虐殺の責任を負う者には，神の裁きによって妥当な罰が科されるに違いないでしょう。……

……神の独り子が自ら体現された純粋な愛と赦しの精神を互いに差し伸べることによって，わたしたちがここで亡くなった人々に敬意を払うことができますよう，息子および娘であるわたしたち全員の御父である天の神様の祝福がありますように。」（“150th Anniversary of Mountain Meadows Massacre,” 2007 年 9 月 11 日，mormonnewsroom.org/article/150th-anniversary-of-mountain-meadows-massacre）

© 2015 INTELLECTUAL RESERVE, INC. ALL RIGHTS RESERVED.